

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 大江健三郎 『万延元年のフットボール』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 85 回のツイキャス読書会の課題図書は、大江健三郎さんの『万延元年のフットボール』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『臭くて熱い犬』

読み初めてすぐ、分からない言葉が出てきて、その後も難しい漢字も色々出てきて調べながら読む事に挫折しそうになりました。

リテラシーの無い者は読まなくていい！と言われてるような少し拒絶された気持ちになりましたが、

宮澤さんが、「個人的な体験」を読めたらこの作品も読めるのではと話されていたのを聞いて、私にも読めるはず！と言い聞かせながら読みました。

ちゃんと最後まで読んでいませんが、最初の頃に出てきた、まっくらな犬の事が気になりました。

犬は最初、蜜に飛びつこうとしたけど蜜が拒絶したことを理解して声もたてなかったのに、自分から熱くて臭い犬を抱いていたのが何故なんだろう？ と思いました。

私には、蜜が動物好きには思えないのですが、でも暗い穴ぼこの中に入ってみると仲間のように思えたのかな？ と思いました。

蜜という人は

ずっと孤独で、淋しい印象を持ちました。

友達は意味深な自殺をしてしまうし、妻とも心が通わなくなってしまうから自分は一人で大丈夫だと言い聞かせながらも淋しい感じがしました。

谷間で、色々な事があつたし、一人だけ浮いてる感じがしてたから早く出て行けばいいのに、雪を言い訳に出て行けないように感じました。

ずっと穴ぼこの中に居るような感じでそこから動けないでいる蜜が、本当に谷間から出でいくことが出来るのかと、心配になりました。

私は蜜は妻と別れて別の世界で生きて行って欲しかったなと少し思いました。

私は妻は蜜を利用している感じがして少し可哀想にも思いましたがそのおかげで、臭くて熱い犬と穴ぼこから抜け出せたのかな？と思うと、二人はお互いが必要なのかな？ と思いました。

(おわり)

『万延元年のフットボールを読んで』

万延元年のフットボールを最後まで読んだが理解出来ない事が多かった。今回は再読した時のための読書記録として感じた事を残したいと思う。

物語は蜜三郎が浄化槽の穴に入ることから始まる。奇異な行動だけれど私はこの穴に蜜三郎が入らなければ、彼は自死してしまうのだろうと思った。そしてその穴の煉瓦壁を爪が剥げ血がでるまで削ってしまう蜜三郎。人は逃げ場のない辛さを抱えると、自分の存在そのものに苦しみ、世界の明るい中心ではなく、穴へ、壁へ向かって、姿を消したくなるのだろう。

蜜三郎の弟、鷹四は究極の甘えん坊のナルシストな奴だなと思った。妹にした事は許されない事だが、普通といわれる事からはずれ、そのようにしか生きられない人達の苦しみを私は知らないで生きているのかもしれない。

10代の頃、なんとなくつけた深夜のテレビで外国の映画がやっていた。とても静かな映画だった。雪深い山奥、父母と兄と妹が暮らす一家。この家以外は他に民家も見当たらないほど人里離れた山奥で、あたりは一面の雪に覆われていた。映画は音楽もなくただ台詞だけがあつたように思う。思春期の兄妹。両親がしばらくいない時、兄と妹は関係を結んでしまう。そして最後に帰ってきた両親を兄妹は猟銃で撃ち殺して終わった。この兄妹は世間から離れて2人でひっそりと暮らすのだろう。世間がなければ鷹四と妹は生きられたのだろうか？

「本当の事を言おうか」と鷹四は言った。本当の事は根所家は実はみんな知っていたのではないだろうか？という疑問がうかびあがる。

谷間から出て、蜜三郎はアフリカに行き、妻菜採子は鷹四の子供を産み、施設から子どもを引き取って新しい生活を始めたら蜜三郎は穴から出る事はできるのだろうか？

浄化槽の穴はどこにでもある。牛乳配達人が蜜三郎に声をかけたように、例えば穴に入った私を誰かが見つけてくれるかもしれないが、だとしても穴から出るかどうかは自分次第だろう。

余談だが登場人物の名前が変わってるなと思った。

(おわり)

『根所蜜三郎様、菜採子様』

はじめに、今回最後まで読みきれませんでした。

根所蜜三郎様、菜採子様。現代の日本では医療の進歩に伴い母胎の中、周産期トラブルなどで重度の障害を負った後、気管切開、人工呼吸器、痰の吸引、胃ろうなど医療的ケアが必要な子供でも生きていく事ができる世の中になりました。

医療的ケアが必要な子供が自宅、地域で受け入れられるような体制を整えようとする声が上がリ、国もそれに耳を傾けはじめました。

それでも我が子のケアにあたる親達の心身の負担は消え去ったわけではなく、子供だけでなく親の心身のケアも重要と考えています。

蜜さんが菜採さん経由で、ジンから子供の障害は蜜さんの小学校時代のひきつけが原因であると言われた際、私なら激昂するか、ショックで泣いてしまうと思いました。

現代でさえ知識のない人の悪意のない言葉に傷付く事は多いでしょうが、周囲から切り離された谷間の村では尚のことと思います。

今では少なくなりましたが、私もふとしたきっかけで過去の嫌な経験を思い出したり、嫌な夢をみる事もあります。

記憶を司る海馬と言う脳の部分は情動を司る部分とも繋がっているので、蜜さんや菜採さんが子供の事を思い出したり、アルコール依存になってしまったのも猿から進化、枝分かれしたヒトであるが故と思っています。

あなた方が年をとっていきますが、重度の障害があっても子供は自分なりに環境に適応し成長していきます。

私は第 8 章からすっ飛ばして巻末を読みました。蜜さん、菜採さんがお子さんと共に新しい生活を始める草の家が幸多かれと願います。

最後に大江先生が神仏を信仰しているかいないか存じ上げない私が、最近感銘を受けたブツダの言葉を引用してこの手紙を結びます。

目に見えるものでも、見えないものでも、遠くに住む者でも、近くに住むものでも、すでに生まれたものでも、これから生まれようと欲するものでも、一切の生きとし生けるものは、幸せであれ。

(おわり)

わたしはこの小説を乗り越えられるだろうか

大江健三郎作品を読むのは、今回が二冊目で、「万延元年のフットボール」は「個人的な体験」のときよりも胸が苦しかった。中毒性のある文体は、集中して読んでいると息継ぎを忘れ、溺れているような感覚に捕らわれる。

根所家で残された兄と弟。その妻。蜜三郎と鷹四と菜採子の空虚感と無力さはすっぱり暗闇に落ち込んだままに、親衛隊のハイティーンを連れて四国の森へ帰郷する。

登場人物の共通感覚は「依存に逃避に絶望」。

蜜三郎の独白は客観性を声高に言うばかりだし、実際のところ曖昧な自己に根を張れず浮遊した身の拠り所のなさに不穏さが漂う。

12章を読み終えたとき。隠遁者ギーの眼があり、鷹四の車の事故と村の娘への殺人の気配、その独白。夫婦の間に生まれた赤ん坊の幻想とのリンク。さらには鷹四による妹との関係を露わにすることでみずから望んだ贖罪羊。その叫びの声は、兄との最後の理解に応えてもらえず、銃口が自身に向けられた最期。

このクライマックスのために、周到に準備されてきたお膳立てだったのかと耳の奥がしびれる麻痺感覚に襲われた。主題の時代性、複雑さ、濃蜜さ、歴史背景と登場人物それぞれが抱えている闇の深さを考えているうちに、この小説で書かれている問題ははまだ解決していないのじゃないかと思わされる。

(引用はじめ)

暗闇のうちに僕が観照する永年の友だった猫の眼は、鷹四の眼、見知らぬ曾祖父の弟の眼、すもものように赤い妻の眼へとつながってゆき、それらは明瞭な連環をなして僕の経験のうちにまことに確実なものとして固着しはじめる。この連環は僕の生涯の残りのすべての時間にわたり増殖しつつづけて、やがてはひとつながりの百種もの眼が、僕の経験の世界の夜をかざる星となるだろう。それらの星の光にさらされて恥ずかしい苦しみをあじわいながら、僕はただ一個の眼をもってネズミのように小心に、曖昧で薄暗い外部世界をうかがいながら生き延びる…… (440頁)

(引用おわり)

著者からのあとがきのタイトルは「乗越え点として」だった。現時点でこの作品を乗越えたとは言えない。けれど乗越えたいと思っている。大江作品の持つ、深い憂いの意味を本当に理解し、寄り添えるかどうかはわからないけれど、日本人としての IDENTITY を問われていることはわかる。曖昧で薄暗い外部世界をうかがいながら、生き延びるしかない現代の日本人の在りよう。発表から 60 年近く経った今も問いは同じなのだろう。答えはなくとも生き延びるしかないと言者が言うように。

(おわり)

『 本当の事を云おうか…？ 』

私は読書の際、行間に自らの居場所を据えて、自らの運転で、小説を進んでいくのが常だ。しかし、大江氏の小説はそうはいかない。「行間」という安息地がないのだ。圧倒的な語彙の渦と緻密な文体、主人公の内省の深さに翻弄されて、自動運転でこの小説の世界観へ引きずり込まれる。『個人的な体験』に引き続き、今作ももちろんそうだった。

安保闘争に挫折した蜜が、弟の鷹の米国からの帰国で再び交錯していく。友人の溢死、障碍児の息子、妻のアルコール依存と問題山積の蜜は、鷹からの四国への帰郷への打診に応じてしまう。その鷹は、曾祖父とその弟兄弟と自らを重ねていく。曾祖父の弟をなぞることで、自らの根っこを模索するかのごとく、万延元年の一揆の再現にはしる。

蜜の関知しないところで、どす黒い秘蜜を抱えていることを匂わす鷹。蜜との直接対決の際に、「本当の事を云おうか」と話し出すが、蜜との見解の違いが浮き彫りになる。

「本当の事」って一体なんだ？

本当の事とは「真実」でしかありえないが、結局は実体がない。アルコール依存の妻の鷹との蜜通、顔を朱色に塗って、胡瓜を肛門に挿して縊死した友人のこと、何も「本当の事」はわからない。一番身近な関係であっても、人間それぞれの認識の内側にしか「本当の事」はない。真実とイコールではないのだ。鷹の真実と蜜の真実は違うし、妻の思いも理解できない。何が「本当の事」なのかは、自らが選び取るしかないのだ。私自身、「真実」と信じ込んでいることが、自らの頭の中だけではないかと空恐ろしくなる。

鷹が、あんなに万延元年の一揆にこだわっていたのも、「本当の事」と史実としての「真実」のすり合わせをしたかったのかもしれない。蜜が石造りの倉に入ったのも、記述としての「真実」に触れるためだろう。頭の中と現実が乖離している状態は、自らのアイデンティティが定まらず、宙ぶらりんだ。でも、蜜と鷹兄弟に、菜採子、星と桃、縊死した友人…誰一人、頭の中の「本当の事」と「真実」が一致していない。結局、鷹と縊死した友人は「死」によって、帳尻を合わせてしまった。

だが、最後に蜜と菜採子夫婦が「死」ではなく、やり直すことで前を向いたことにはホッとした。いつか落ち着いたら、「期待」とペンキで書いた象も現れるだろう…蜜の頭の中にだけ。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。<http://ameblo.jp/kaoru8913/>
スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。
ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

『共依存と暴力を克服するための闘争』

念仏踊りは、愛媛出身の一遍上人があみだした。南無阿弥陀仏を唱えて踊れば、救われるというのが時宗である。無力感から救われるために、念仏を唱えながら踊ったのである。

敗戦国として再出発した戦後の日本は、日米安全保障条約というくびきの中にいる。敗戦は日本の政治体制を民主的にした。しかし 60 年の安保の改正においては多くの民衆が、時の政府の強権的なやり方に反発して、安保闘争という名の政治運動に加担した。蜜三郎の自殺した友人も鷹四も、安保闘争で傷を負った。

友人は、頭の傷によって引き起こされた薬物依存とマゾヒズムに囚われ自死した。鷹四は、サディズムに囚われ、谷間の村で民衆を煽って、反資本主義運動のようなものを展開する。

サディズムとマゾヒズムは共依存の関係にある。覇権国アメリカと、敗戦によって従属的地位に置かれる日本も、サド・マゾの共依存にある。資本の価値の自己増殖と、自らも労働力を商品として売る消費者＝賃労働者も共依存関係だ。現代の社会関係は、多かれ少なかれ共依存を前提としている。共依存は、人間からあらゆる自由を奪い、無力感を与える。蜜の無関心と逃避癖、菜採子のアルコール依存、ジンの過食も共依存が原因だ。

鷹四は、サディズムによってリーダーとなったが、心の奥底は、マゾヒズムに支配されている。サディズムによって妹を自死に追いやった罪悪感が、彼を自己処罰というマゾヒズムにかりたてる。罪悪感にとられるほど政治運動における自己欺瞞が激しくなり、彼は支配の手段としての暴力を正当化する。暴力は、集団的な熱狂を生むが、同時に、恥の意識を植え付け、ますます群衆を自己正当化への暴力へ駆り立てる。

曾祖父の弟が、土佐藩の人間に導かれて、アメリカに渡ったのではなく、実は、蔵屋敷の地下倉に引きこもって非転向を貫いていたというのは、衝撃的な結末だった。彼は、明治四年に一度だけ地上に出て、一揆を指導し、民主的勝利を勝ち取った。

人は銘々の地下倉で、自分のかかえる欺瞞に向き合い、それを克服しなければならない。共依存から逃れ、無力感と恥を克服し、自由になるためにも。

曾祖父の弟は、地下倉の中で、無力感を克服し、政治的挫折を乗り越えたのだ。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343